

漢詩に親しむ 其二

いろいろもの

音曲 漢詩を唄う

藤木英夫（会員）

漢文は難しい。散文では文の切れ目も明示されていない。訓古学（古典漢文の解釈学）の半分は、漢字の羅列に句読点を付ける事だと言われているらしい。古典漢文に様々な解釈があり、時に正反對のものが混在しているのも宜なるかなである。

同じ漢文でも、漢詩、特に絶句・律詩等の定型の詩（近体詩と呼ばれる）は事情が違う。掛軸等で見えるように例え二十八の漢字が羅列されているだけだとしても七言絶句である事が分かってさえいれば、小さな切れ目・中くらいの切れ目・大きな切れ目が分かるからだ。次のようになる。

○○○○○○○、○○○○○○○。
○○○○○○○、○○○○○○○。

作詩者はこの約束のもとに作っているのだから、読み手はこの約束のもとに読めばよい。それぞれの漢字一字一字を思い浮かべながら二三のリズムで、（日本語の）音（オン）で読んで行くのだ。そのように読んでみると、多くの詩が驚く程素直に読みとれる事に気がつく。もち

ろん、知らない漢字が使われていたり、知らない典故（故事の引用）があったりした時にはそれを調べた上での話にはなる。だから、新しい漢詩に出会って、そのまま読みとれない時に、まず行うべきは漢和辞典を引く事なのだ。注釈や翻訳を参照するのはその後の事だろう。始めから訓読（これは一種の翻訳であり、更に元詩のリズムは失われている）に取りかかるのは、注釈者のフィルターを通す事になり、解釈も味わいも大いに狭まり、かつ薄まって、いかにももったいない。

ところで、この（二三）×四の形式は楽曲の「二部形式」と全く同じ構造をしている（「二部形式」については次頁の音楽教科書のコピーを参照して頂きたい）。この事は、ここで述べた音読法を更に楽しいものとする。内容に合うようなメロディに乗せて、その漢詩を音読するのだ。二部形式の楽曲は世の中にあふれている。手許の唱歌集をめくると、半分は二部形式、「春の小川」、「夕焼け小焼け」…。唱歌ばかりではない、美空ひばりの「悲しい酒」、カントリー「マンション オン ザ ヒル」、モーツァルト「春へのあこがれ」等々。試みに蘇軾の「春夜」（次頁参照）を「花」（春のうらの隅田川…）に乗せて、漢字を思い浮

かべながら唄ってみて下されば楽しさを納得されるだろう。

私が作詩を始めた頃、気入りの歌の詞を、習作がてら絶句に直す事を試みて、その詞の音律から「これは日本語の七言絶句だ」と感じたものがあり、面白くは感じたが、深くは考えずそのままになっていた。実は、昨年同年の仲間三人で伊豆七島の一、利島へ旅した。その内の一人松籟（号）氏とは以前から、氏は短歌、私は絶句を作り、やり取りを楽しんでおり、この時も、私は旅の印象を五言絶句二首にして松籟氏に送ったところ、何とその二首分も含めて、短歌ではなく、二十二番まである「鉄道唱歌」の替え歌が返って来た。私は大慌てで、それらに対応する絶句を作らざるを得なくなった。さて五言絶句二十余首が出来上がってみると、当然の事ながらメロディに合わせて唄いたくなる。そこで初めて、ここで述べた二部形式の楽曲の構造を意識するに至る。五言絶句では対応出来ない、大改造して出来上がったのが、其一（本年3月号）の冒頭でふれ、次頁に六番までを、松籟氏の詞と共に載せた絶句である。

七言絶句でなければいけないのだ。曲も詞も、楽曲の、そして日本語の七言絶句なのだから。

楽曲の二部形式の説明

下総皖一他編 高等学校用音楽(中教出版1958)より抜粋

楽式 (Musical Form)

1. 動機 (Motive)

楽曲を構成する単位のもっと小さいものは動機で、これは普通2小節から成り立つ。

2. 楽節 (Phrase)

動機が二つ続いたものを小楽節という。小楽節は普通4小節で成立する。

3. 大楽節 (Period)

二つの小楽節を大楽節という。つまり大楽節は、前楽節と後楽節の二つから成り立つのである。

小さな楽曲は、この大楽節だけでできているものもある。また大きな楽曲も、いくつかの大楽節が合わさってできるものである。

4. 一部形式

一個の大楽節からできている楽曲を、一部形式という。「春が来た」はこの例である。

5. 二部形式

原則として二つの大楽節からできていて、各々の大楽節が完全終止になっている。従って16小節から成り立つのである。



*「完全終止」等は各楽節の終りの和音の進行の型の事

春夜 蘇軾

シュンショウイコク チセンキン
春宵一刻値千金
カクウ セイコウグツユウイン
花有清香月有陰
カカン ロウダイ セイセキセキ
歌管楼台声寂寂
シュウセンインラク ヤ チンチン
鞦韆院落夜沈沈

現今の電子辞書の漢和辞典なら
手書き入力で検索すれば、
スイッチオンから1分程度で、
鞦韆がブランコ、
院落が中庭、である事が知れる。
訓読を読んだり、注釈を見るのは、
そうやって
内容を、ほぼつかんでからにしたい。

伊豆七島航路唱歌

—鉄道唱歌のメロディ (多 梅雅 作曲) に乗せて—



—
汽笛一声竹芝を
はや我が船は離れたり
東京タワーにかかりたる
月を旅路の友として
二
ベイブリッジの下くぐり
赤灯台を右に過ぐ
横浜の街一望に
大栈橋に着きにけり
三
デッキに出れば風寒し
雲は次第に紅に
水平線のかたより
金色の道日は昇る
四
岡田の港は夜明けにて
光輝く新緑の
崖間近なる岸壁に
船は回頭近づけり
五
次第に迫る宮塚の
山すそ海に落込て
汽笛二声尾を引いて
利島の港に船いりぬ
六
昨日登りし山頂を
海の上より仰ぎ見る
船尾に白き泡の道
利島の港を離れ行く
(松籟)

—
汽笛一声鳴竹芝
我船知已棧橋離
高懸明月東京搭
出現旅中同伴姿
二
通過湾橋仰白姿
赤台一看右塘陂
眼前入望横浜夜
今は抛錨大栈橋
三
黎明船上依寒風
灰暗雲霞漸漸紅
遙海来昇日丸大
下看金道渡波通
四
終于来到岡田港
新緑晨光照映浮
前面懸崖来近迫
船随岸壁転回頭
五
漸迫眼前宮塚山
麓裾直接海中間
両声汽笛吹長響
終到吾船利島湾
六
昨日登嶺陽緑暉
如今海上仰望帰
船行留下白波道
眼裏山容漸漸微
(遺峰)